

1. 目的と概要

芸術文化活動に対する意識の低下が指摘される中、音楽によるアウトリーチ活動は、地方自治体などの主導によって少しずつ実施されるようになってきた。しかし、香川県内においては、まだその活動が盛んであるとはいえない。そこで、日頃コンサートホールへ出かける機会の少ない小学生や、育児等を理由に演奏会に足を運ばない保護者、心身の障害等によりコンサートホールで音楽を楽しむ機会の少ない方々を主な対象として、気軽に楽しんでいただけるような演奏会を開催したいと考えた。また、会場の環境だけでなく、その演奏内容についてもより質の高いものを提供したいという願いを強くもっていたところ、海外の著名なオーケストラで活躍するヴァイオリニストをはじめ、香川県内外の優秀な奏者の方々がこの企画の趣旨に理解を示してくださり、演奏の面でご協力いただくことができた。

企画の申請当初、コンサートのタイトルは未定であったが、集まった学生の意見をもとに、子どもたちにより親しみを感じてもらえるよう「わくわくコンサート」とした。また、低年齢の子どもたちが飽きずに過ごせるよう、開場後のロビーを使用してリコーダー、鍵盤ハーモニカによるミニコンサートや、「みんなであそぼ」と題した児童文化研究会によるイベントも行った。終演後は、演奏会で使用した楽器をより身近に体験できるよう、直接楽器に触れることのできる展示コーナーを設けた。

このコンサートの特徴のひとつに、バックグラウンドの異なる学生が協力して、演奏会を企画、運営するということが挙げられる。構成員は、音楽を学んでいる学生だけではなく、他の教科領域、様々なサークルや部に所属する学生が集まった。そして、それぞれの視点から意見を出し合い、より良い演奏会になるよう努めた。

2. 実施スケジュール

平成 19 年	7 月 25 日	第 1 回ミーティング (以降、必要に応じて不定期で開催)
	12 月 9 日	香川県県民ホールアクトホールにてホール実習
平成 20 年	2 月 10 日	みんなで楽しむ音楽鑑賞会 リハーサル
	2 月 11 日	みんなで楽しむ音楽鑑賞会 本番



ミーティング風景



ホール実習の様子

3. 成果の内容及びその分析・評価等



●チラシのデザイン

演奏会のチラシは、教育学部美術領域の学生に依頼した。打ち合わせの際に、他のコンサートのチラシや、CD や DVD などの音源を提示するとともに、このコンサートの趣旨や、曲の内容についても紹介させていただいた。忙しい中、短期間での作業を依頼したにもかかわらず、コンサートの内容に合った、とても良いものに仕上げてくれた。以下、担当してくれた4人を代表して、美術研究室の小片麻衣子さんのコメント(音楽領域のホームページにてインタビュー記事として掲載されたもの)を紹介する。

小片さん：まずどんなイメージでいくか、研究室の3年生4人全員で決めました。水彩で明るく、動物達がいっぱい出てくるような感じとおおまかに決めたところで、私以外の3人(倉岡・佐藤・山原)が元になる絵とレイアウトを描いてくれました。それを加工してチラシとして仕上げるのが私の役割だったのですが、どうしても絵の色が気に入らないと無茶を言ってレイアウトはそのままに描き直しました。皆には悪いなあと思いつつも改変を快く了承してくれたので、結果的に良いものができたと思っています。

小片さんは、チラシだけでなく演奏会当日《ピーターと狼》の背景で使用するイラストも同様に仕上げてくださいました。いずれも、子どもたちをはじめ、一般の方にもとても好評であった。

●開演前のイベント

会場に来た子どもたちが、開演までの時間も楽しむことができるよう、演奏会前後のイベントについてさまざまな案が出された。スペースの問題で、実施できるイベント数も限られたが、音楽領域の学生や院生、児童文化研究会の方々に協力いただき、ミニコンサートや手遊びなどの出し物を行った。また、現職の先生にも協力していただき、「音楽なんでも相談室」も開催した。ロビーの一角では、ヤマハ高松店による小物楽器の展示もしていただいた。



リコーダーと鍵盤ハーモニカによる
ミニコンサート

児童文化研究会は“みんなであそぼ”と題して、未就学児や、小学校低学年の子どもたちを対象とした、手遊びなどを披露してくれた。保護者の方々が子どもたちを囲むようにして見守る中、子どもたちは、大学生のお兄さんやお姉さんの歌声や体の動きに集中しているようであった。子どもたちが、ミニコンサートの音を気にしないかと心配したが、階上のロビーで行ったミニコンサートとは全く別の空間として楽しめたようである。

リコーダーや鍵盤ハーモニカは、誰にでも身近な楽器であり、子どもたちにも“自分もできる楽器”として親しみが深い。ここでは『ドラえもん』や『アイネ・クライネ・ナハトムジーク』といった誰もが耳にしたことのあるような曲を演奏した。特に気に入った曲には、子どもたちから「アンコール」もあった。このような演奏を身近に聴くことも、子どもたちが音楽に対してより興味を持つきっかけになるのではないかと思う。



みんなであそぼ



音楽なんでも相談室

“音楽なんでも相談室”は、教育学研究科の大学院生と、現職の教諭に協力していただき、音楽に関して疑問に思っていること、心配なことなどの相談に対応した。リコーダーの奏法や、ピアノを習うことについての相談が寄せられた。問題解決の手がかりとなれば幸いである。

近年、開演前のプレイベントが催される演奏会も増えてきているものの、多くの演奏会では、来場してから開演までの時間をただ待つことで終えてしまう。曲目解説等に目を通して過ごすことなどは可能であるが、子どもたちにとっては退屈してしまう原因となるだろう。その意味でも、この開演前の催しは非常に有効だったと思う。実際にいずれのイベントも盛況であった。

●演奏会

演奏会では、3つの作品を採り上げた。この選曲にあたっては、小学校学習指導要領をもとに検討し、低年齢の児童も楽しめるよう1曲ごとの演奏時間にも配慮した。一般的なクラシック音楽の演奏会では、1時間半から2時間近くを要することが多いが、今回の演奏会では、総演奏時間を1時間以内に設定した。また、“お話と音楽”をテーマにしたことで、さまざまな角度から「聴く」ことを楽しめたのではないかと思う。

1曲目に選んだアラン・リドゥ作曲『牡牛のフェルディナンド』は、ヴァイオリンの独奏と朗読という編成。頻りに演奏される作品ではないが、『牡牛のフェルディナンド』はディズニーの短編映画シリーズのひとつということもあり、その物語の内容は、子どもたちにとってもわかりやすい

ものであると思う。さらに、ヴァイオリン1本で様々な技巧が繰り広げられるこの音楽は、ヴァイオリンという楽器の音色や技巧の紹介として非常に効果的であった。実際に来場者から、この曲によって「ヴァイオリンのいろいろな演奏技術を知った」という意見も聞かれた。

2曲目には、サン・サーンス作曲『組曲《動物の謝肉祭》』から6曲(全14曲)を抜粋して演奏した。2台のピアノを中心に、ヴァイオリン、クラリネット、サクソフォーンを加えた編成で、〈序奏と獅子王の行進〉〈めんどりとおんどり〉〈水族館〉〈化石〉〈白鳥〉〈フィナーレ〉を演奏した。さまざまな動物が描かれたこの作品は、演奏会で採り上げられることも多い。また、第13曲『白鳥』は、小学校の鑑賞教材として香川県内で使用されている教科書でも扱われている(平成20年3月現在)。ここでは、お話を入れず音楽のみを聴いていただいた。1曲ずつの演奏時間が短く、それぞれのキャラクターがはっきりしているため、物語がなくても十分楽しんでいただけたようである。

最後に採り上げたのは、プロコフィエフ作曲『ピーターと狼』。この作品も小学校の鑑賞教材として扱われる作品で、今回の演奏会の中心的な楽曲となった。もともとは、オーケストラのために書かれているが、今回の演奏会のために岡田知也先生(教育学部音楽領域)に編曲を依頼し、ヴァイオリン、フルート、クラリネット、ホルン、サクソフォーン(ソプラノ、アルト、バリトン)、パーカッション、ピアノという特別な編成で演奏した。

各楽器がそれぞれ登場人物を担当するこの作品では、冒頭で楽器紹介を兼ねた登場人物の紹介を行った。子どもたちはもちろん、保護者の方もはじめて見る楽器があり、一つずつの楽器の音色を知ることのできたことは良かったようである。また、他の作品に比べて演奏時間が長いため、視覚的にも楽しむことができるよう、舞台後方に物語に沿ったいくつかのイラストを写した。子どもたちが、物語の場면을イメージする上でのヒントとなったのではないだろうか。

●終演後の楽器体験

終演後は、演奏会で使用した楽器に触れる時間を設けた。舞台上では、ピアノやマリimba、その他打楽器類、ロビーには、ヴァイオリン、フルート、クラリネット、ホルン、サクソフォーンを用意し、子どもたちが、担当のスタッフとともに音を出してみたり、触ってみたりした。いずれの楽器にも多くの子どもたちが集まり、時間いっぱい楽しんでた。



終演後の舞台



終演後のロビー

会場から出る人や、楽器体験コーナーに並ぶ人で大混雑でした。

舞台上では、マリimbaやピアノのほか、指揮台に上って指揮の真似をする子どもたちの姿も…。

ピアノは見慣れてるかな?とも思いましたが、フルコンサートピアノの大きさに驚いた様子でした。



●ヴァイオリンのコーナー

特にたくさん子どもたちが集まりました。

予定していたスタッフでは人手が足りず、近くにいた学生さんにもお手伝いいただきました。

子どもたちはフルサイズのヴァイオリンでも頑張って弾いています♪

●フルート&クラリネットのコーナー

フルートは音を出すのが難しかったようですが、たくさん子どもたちが挑戦していました。奥にわずかに見えるのがクラリネットのコーナー。

クラリネットのコーナーでは《ピーターと狼》に登場した「猫」の旋律や、演奏会とは別に準備していた二重奏も聴かせてくれました。



●サクソフォーンのコーナー

サクソフォーンは、演奏で使ったソプラノ、アルト、バリトンの3種類を用意しました。見慣れない形のものもあって、恐る恐るキーを押さえていました。近くで見ると、押さえるところがたくさんあるので、10本の指だけで、どうやって演奏するのか不思議そうでした。

●ホルンのコーナー

ホルンも、身近に見ることの少ない楽器の一つだと思います。

音を出すのはとっても難しいのですが、顔を赤くしながらもあきらめずに頑張っていました。中には、息と一緒に声を出すお友だちも…。



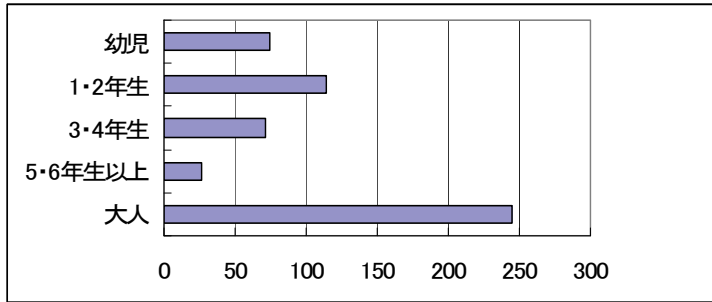
楽器体験コーナーでは、附属高松中学校や香川大学吹奏楽団などから楽器を提供していただいたほか、個人の楽器も持ち寄っていただいた。また、教育学部音楽研究室の卒業生もスタッフとして参加してくれた。あまりの人の多さに、学生や卒業生が顔を合わせる時間はなかったが、後日、この楽器展示コーナーを手伝ってくれた卒業生から以下のようなメールをいただいた。

—香川大学教育学部卒業生

Mさんからコンサートの趣旨を聞いた時、私はすごくいいアイデアだなあと思ったので参加できて嬉しかったです。私の知り合いも数人子連れで来てくれていましたが、楽しんでくれたみたいですよ。私自身、今はあまり子どもと関わることはなく、久しぶりにあのような機会を得ました。どのように子どもに接したらいいか、始めは手さぐりでしたが、それもつかの間。『触ってみたい』『吹いてみたい』という子どもの好奇心が行動となって表れていたもので、こちらはそれの手助けをするまででした。私が教育学部で学んだことや、児童文化研究会に所属していたときのこと、数年前に学校で勤めていた経験…などなど、いろいろなことが活かせて、私にとっても本当に良いコンサートとなりました。このようなコンサートに参加させていただいて、本当にありがとうございました。またの機会があれば、参加させてください。

●アンケート及び来場者の反響

コンサートの来場者に対してアンケートを行った。なお、アンケートに協力してくれた方には、手作り楽器の型紙などをプレゼントした。無回答のものもあったが、多くの方が協力してくださった。

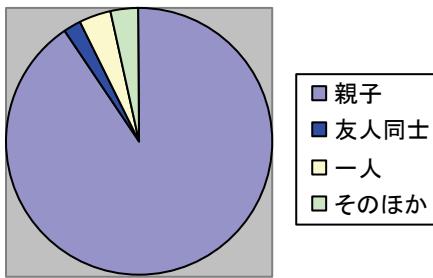


●アンケート学年別内訳

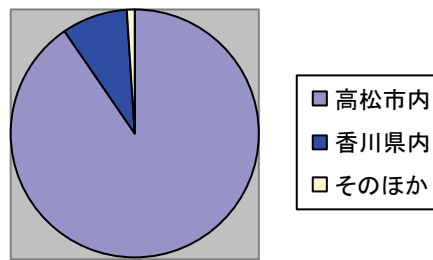
保護者の方がほとんどであるが、低学年の子どもたちも自由に記述をしてくれた。アンケート用紙もプログラム同様、学年別に用意した。

【保護者のアンケート結果】

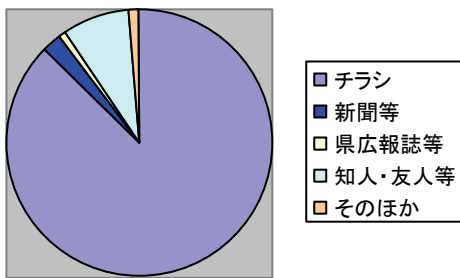
1. どなたとご来場いただきましたか。



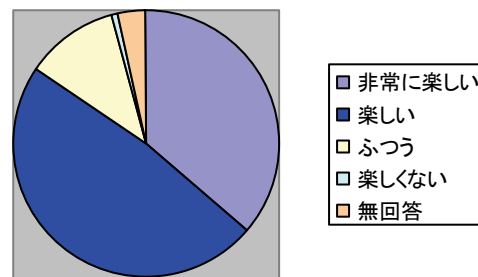
2. どちらからお越しになりましたか。



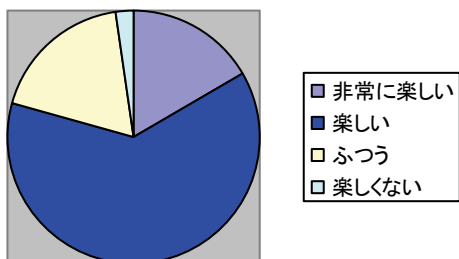
3. この公演を何でお知りになりましたか。



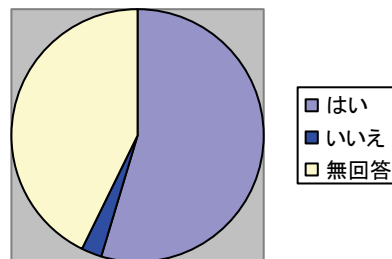
4. 本日の公演はお楽しみいただけましたか。



5. プレイベントはお楽しみいただけましたか。



6. お子様は楽しんでいらっしゃいましたか。



チラシは、高松市内の小学校や幼稚園、保育所、香川県内の特別支援学校などに送付した。他の広報活動としては、香川大学や音楽領域のホームページ、ホールの催し物案内や高松市の広報紙のほか、各新聞紙面でもイベント情報として掲載いただいた。いずれも反響をいただいたが、集客には、子どもたちに直接渡されるチラシが最も効果的であったようだ。今回の会場である県民ホールは、比較的立地条件が良いため、高松市内の方にとっては出かけやすい場所であったと思う。当初、集客に関して懸念もあったが、本当にたくさんの方が来てくださった。客層としては、ほとんどが親子での参加で、低年齢の子どもたちが多かった。また、特別支援学校に通う生徒さんも参加してくれた。しかし、予想を上回る入場者数であったため、車椅子で来てくださった方などには、通路の移動など、窮屈な感があったのではないかと思う。

演奏については、アンケートによると、ほとんどの方に楽しんでいただけたようだが、約1%について楽しくなかったという回答があった。また、終演後の会話の中で「曲が難しい」という意見も聞かれた。選曲にはかなり配慮したつもりであったが、普段全くクラシック音楽を耳にされない方にとっては、馴染めないものもあったかもしれない。このことについては、今後の検討課題としていきたい。プレイベントでは、参加してくれた方のおよそ8割の方が楽しんでくださったようである。しかし、楽器の数や担当者の人数などが、参加してくれた子どもたちの人数に対して少なかった。予測できない部分であり、やむをえなかったが、もっと数に余裕があればより多くの子どもたちに楽しんでもらえたのではないかと思う。

このほか、アンケートの中で多くのご意見をいただいた。そのほとんどは、次回の開催を期待するものであり、こういったイベントをもっと増やしてほしいということであった。また、アンケートとは別に、演奏会終了後、実行委員会宛に今回の演奏会への賛辞と次回への期待が書かれた手紙もいただいた。親子で参加してくださった方が、自身のブログに感想を掲載されていたのでその内容を紹介する。

—Tさん(男性)

子供たちと一緒に、わくわくコンサートに行きました。(中略)・・・どの曲も、明るく、楽しく、いろんな楽器が出てきて、動物をイメージしていて、なかなか楽しかったです。僕の車には、クラシックを結構入れています。子供たちもよく聴いています。「動物の謝肉祭」もよく聴いているので、「これ、知ってる～」って喜んでいました。

演奏会後は、楽器に触れるコーナーもありました。ホルン、クラリネット、サクソ、フルート、ピアノ、バイオリンなど。息子を、ステージの指揮者台に乗せると、まんざらでもない顔をしていました。『のだめカンタービレ』のおかげで、クラシックが好きになった子供たち。

こんなコンサートが、香川に根付くといいなあ。

演奏会当日、夕方のニュース番組(KSB瀬戸内海放送)でも演奏会の模様を採り上げていただき、取材担当の方からも、プレイベント、演奏内容ともに非常に良い評価をいただいた。また、このようなイベントが多く的大学生によって開催されたことを特に評価していただくことができた。

4. この事業が本学や地域社会等に与えた影響

先にも述べたように、バックグラウンドの異なる学生が、それぞれの得意分野を生かして取り組むということはこの企画のひとつの特徴である。これは、香川大学がさまざまな学部、領域、多くの部

活動やサークルを有する総合大学であるからこそ可能なことである。そして、実際に多くの学生が協力をしてくれたことで、このように盛大な演奏会を開催することができた。

香川県では、地元のオーケストラなどが中心となって、アウトリーチ活動を行うこともあるが、その頻度が十分なものであるとはいえない。その理由としては、聴衆の意識がクラシック音楽に向きにくいことや、費用の負担などが挙げられるだろう。地方自治体等による催しもあるが、定期的で開催されるものではない。そんな中で、地元の大学が主体となってこのようなイベントを開催することは、子どもたちの鑑賞教育としてだけでなく、地域の芸術文化に対する意識の向上にも繋がるものである。

また、学外においてこのような大きなイベントを開催することができたことで、在学生に対して多くの可能性を示すことができたのではないだろうか。

一般の方の反応は、来場者のアンケートを基に判断するところが大きいですが、ぜひ続けてほしいという意見を多数いただいた。これは、このコンサートを楽しんでくれたことによるものだと思う。もともとクラシック音楽が好きな方、嫌いだと思っていた方、今回はじめて聴いて興味を持ってくれた方、それぞれ感想は異なるだろうが、このコンサートによって、今後、クラシック音楽を楽しむことへのきっかけとなれば幸いである。

香川大学のプロジェクトとしては年1回の開催だが、他の団体においてもこういった活動が少しずつ増え、子どもたちにもより良い音楽環境を提供できるようになればと思っている。今回のプロジェクトによって、演奏会のひとつのスタイルを提案するとともに、学生と諸先生方が協力して企画、運営できたことで、またひとつ香川大学の可能性を地域社会に紹介できたのではないだろうか。

5. 自分たちの学生生活に与えた影響や効果等

教育学部音楽研究室では、以前から学内において定期演奏会を開催している。例年、各専攻楽器の演奏や、研究室生全員による合唱などが中心の演奏会である。この定期演奏会でも、企画から当日の運営までを学生が行っており、私自身、学部在学中は毎年関わったイベントである。しかし、「わくわくコンサート」のように学外で多くの一般客を迎えるものとは大きく異なる部分がある。今回のコンサートに協力してくれた音楽研究室内の学生は、また新しい経験をすることができたと思う。また、運営の面では教育学部の学生を中心として、音楽系の部活動やサークルに所属する多くの学生が協力してくれた。慣れないことで、戸惑った学生もいるようであったが、専門外のことにも意欲的に関わってくれる学生もいた。

軽音部に所属する学生さんから、以下の感想をいただいた。

—香川大学経済学部1年生

大学生になって経済学部生の僕が小さな子供達と関わるという事に対して、正直なところ始めはかなりの抵抗感がありました。子供が苦手だということも大きな要因だったと思います。しかし、このボランティアに参加した後、こうして子供達と関わるのも楽しかったと思えました。パンフレットを渡したときに「ありがとう」と言われて、とてもうれしかったのを覚えています。今までは子供たちとちゃんとふれあったこともないのに、子供が苦手という変な意識を持っていたようです。新しい自分の一面が発見できたように思えます。今回は受付として参加しましたが、普段自分と十才も年が違う子供と接する機会がないので、どう話しかけたらいいの

かわからず、やはり最初はかなり戸惑いました。だけど、周りの人の見よう見真似で背の高さを子供の目線に合わせしてみたり、変に敬語を使わないようにしたり、と少し工夫するだけで大分話しやすくなりました。こんな風に相手に合わせて話すということは特別、子供相手に話す時にだけ大切なことではないように思えます。今回、こんな風に意識して話すことによって、普段は相手に合わせて話すということができていなかったことに気付かされました。このように自分の新しい一面を見つけられたり、自分の直すべき所に気付けたことはこのボランティアを通して得た大きな利益だと思います。

ボランティアとして慣れないことを依頼したにも関わらず、このように受け止めてもらえたことに感謝したい。迷惑をかけてしまった学生さんもあり、全員がこのように思ってくれているわけではないと思うが、参加してくれた学生さんの中からこのような感想をいただけたことは本当にうれしい。

6. 反省点・今後の抱負（計画）・感想等

今回のイベントを開催するにあたり、多くの方からご支援をいただいた。特に、教育学部音楽領域の先生方をはじめとする、諸先生方のご協力のおかげで盛大に開催することができ、無事に終えることができた。まず感謝を申し上げたい。

はじめての試みということもあり手探りの部分も多く、当初計画していたものより随分大掛かりなものとなった。その過程で、多くの方にご迷惑をかけた。具体的には、連絡周知不足などが挙げられる。また、演奏会当日のスタッフの動きについても、一部、来場者からご指摘をいただいた。このほか、聴衆のマナーについても多くのご意見があった。今後同様の問題が起こらないよう努めていきたい。

次回は、今回が予想以上の入場者であったことで窮屈な印象になってしまったことを考慮し、開催場所から見直していきたい。また、“お話と音楽”というスタイルが好評であったことなどから、音楽だけを聴くのではなく、他の要素も取り入れられたらと思う。また、運営資金においてもより多くの企業、団体に協賛していただけるよう、広報活動にもより一層力を入れたいと思う。

私自身、このプロジェクトを通して学ぶことは多かった。これまでに個人的にはさまざまな演奏会を開催してきたが、これほど大規模なものではなく、もっと少人数での運営が可能なものであった。大規模になれば、華やかさも増す一方でその責任も大きくなる。自分自身の反省点は多々あるが、多くの学生さんの協力によって開催することができたことは、他では得ることのできない貴重な経験となった。

このプロジェクトに関わってくださったすべての方に、心より感謝致します。

7. 実施メンバー

代表者	安友孝宣（大学院教育学研究科2年）	
代表教員	青山夕夏（教育学部音楽領域）	
構成員	松尾美佳（大学院教育学研究科1年）	増田陽子（教育学部4年）
	川井真緒（教育学部4年）	堀田真央（教育学部3年）
	櫻井悠加（教育学部3年）	井原未由季（教育学部3年）
	半田宗也（工学部2年）	葛西良平（教育学部3年）
	河村美華（教育学部2年）	滝川育美（教育学部2年）

磯崎淳子(ピアノ)

モンツァ国際コンクール入賞、ヴィオッティ国際コンクール第3位。大分県立芸術文化短期大学教授。

今井-スタストゥニー・園子(ヴァイオリン)

メニューイン・アカデミー奨学生。シュトゥットガルト国立歌劇場管弦楽団。

ヤロスラフ・スタストゥニー(ヴァイオリン)

シュトゥットガルト室内合奏団を経て、シュトゥットガルト放送交響楽団。

石川幸司(クラリネット)

ヨーゼフ・ディヒラー音楽コンクール第1位ほか、多くのコンクールで入賞。

森利幸(ホルン)

ヴェルツブルグ市立歌劇場管弦楽団ホルン奏者を経て、現在、中国短期大学音楽科非常勤講師。

安友孝宣(サクソフォーン)

ルーマニア国際音楽コンクール第2位。香川大学特待生。

青山夕夏(フルート)

日本管打楽器コンクール第2位、シュトゥットガルト・フィルで活動。香川大学教授。

川上侑紀(パーカッション)

愛知県立芸術大学音楽科打楽器専攻卒業。高松市立牟礼小学校講師。

大河原小也香(パーカッション)

香川大学教育学部卒業。岡山県備前市立日生西小学校教諭。

梅本香織(ピアノ)

香川大学教育学部卒業。香川県を中心に音楽活動中。徳島県立国府養護学校助教諭。

竹下美保(語り)

OHK 岡山放送アナウンサー。FNN スピーク等報道番組で活躍。「温★時間」(オンタイム)出演。

若井健司(語り)

2001年高松市文化奨励賞。2006年ブルーポラリス賞個人優秀賞を受賞。テノール歌手。香川大学教授。

杉ノ内由紀(ご案内)

香川大学大学院修了。RNC 西日本放送、FM 高松ラジオパーソナリティー。

岡田知也(編曲/指揮)

笹川賞作曲コンクール吹奏楽曲部門第2位。作曲/編曲で活躍中。香川大学教授。

稲田隆之(演出)

東京藝術大学博士課程修了。ワーグナー研究で博士号取得。論文・評論多数。香川大学講師。

薦田義明(監督)

東京藝術大学在学中よりオペラで活躍。1988年高松市文化奨励賞受賞。四国二期会理事長。香川大学教授。

チラシデザイン	小片麻衣子	倉岡杏名	佐藤由香	山原真弓
プログラム・ノート	品地沙由理	守安諒平	旅田郁子	櫻井悠加
プログラム作成	松尾美佳	小片麻衣子		
翻訳	葛西良平			
楽譜浄書	三好賢太郎	岡橋智栄美		

演出	井原未由季 三好賢太郎 忽那祐佳 伊地知理 高宮希 高橋愛美 木村雅貴
イラスト作成	小片麻衣子
会場担当	堀田真央 半田宗也 滝川育美 水島理恵 水馬鉄夫 村尾悠 門田怜菜 本郷百合子 山藤貴史 安間晴基 河村美華 荻野彩子 前田裕美
サポート担当	葛西良平 白井佐和 鈴木貴政 木村雅貴 原田慎二 山本結 山本健太 横田裕
幼児担当	櫻井悠加 岡奈津子
手作り楽器担当	西内貴美
楽屋担当	近成麻子
イベント担当	増田陽子 川井真緒 曾我部友里 寺下真理子 藤井真由美
・みんなであそぼ	森岡好の実 瀧原未奈子 谷川和歌子
・リコーダー	土居裕二郎
・鍵盤ハーモニカ	松尾美佳 西内貴美
・音楽なんでも相談室	岡田知也 岡橋智栄美 川合望美
楽器展示コーナー	
・ピアノ	梅本香織 西内貴美 松尾美佳
・ヴァイオリン	三好賢太郎 土居裕二郎
・フルート	奥村祐加 角田佳奈
・クラリネット	石川幸司 伊地知理 木村雅貴
・サクソフォーン	安友孝宣 光富悠太
・ホルン	井原未由季 高橋愛美

協力

香川大学生協同組合 ヤマハ高松店 香川大学合唱団 香川大学吹奏楽部
池田清史 井原理代 小川育子 加藤みゆき 加野芳正 川田学 坂井聡 佐藤明宏 新見治
鈴木万喜 鈴木正勝 中塚俊勝 花崎桂子 間嶋潤一 柳井修 (50音順、敬称略)

協賛企業等

穴吹興産(株) 松楠会(香川大学教育学部同窓会) 藤原高夫顕彰会

後援

香川県 香川県教育委員会 高松市 高松市教育委員会 香川経済同友会 山陽新聞社
四国新聞社 読売新聞大阪本社 朝日新聞高松総局 毎日新聞高松支局 KSB 瀬戸内海放送
OHK 岡山放送 ヤマハ高松店

協力

香川県県民ホール 指定管理者穴吹エンタープライズ(株)